

都留郡の御 文治一年三月（二五）壇ノ浦の合戦があり源氏方が完勝して戦乱は終わった。内乱の終結を見きわ家人古郡氏 めてから同年一〇月に頼朝は鎌倉勝長寿院で内乱戦死者供養の法要を営んだ。ここはだれでもが源家と坂東武者との因縁を想い出す源頼義に縁の寺である。頼朝が武士団を率いて父義朝に戦勝を報告した儀式ともいえる。翌月には鎌倉幕府の統治原則とでもいうべき守護・地頭が設置されている。この法会の際の行列に甲斐国の武田信光・大井実春ともに加藤次景廉の名がある。この行列に登場するのは、いずれも戦功の高い新旧の主だった武士たちである。加藤氏は甲斐国が本貫の地ではないが伊豆以来の頼朝の郎従であった。後に安田義定討伐の功に依ってその旧領以下を宛がわれて甲斐国に入り郡内地方にもその所領が及び、長く戦国時代まで桂川下流から都留市域まで影響をおよぼすことになる。

建久一年（二六）頼朝は成人後はじめて入洛した。王朝国家に対する報礼に事寄せながら、実質的には東国武士軍団の戦乱勝利の示威が目的であった。頼朝の入洛にあたって貴族たちは加茂河原に車をならべて見物に押しかけ後白川法皇も密々に御覧という。この軍事パレードの随兵のなかに武田・安田らの国中地方の武士と並んで「七番 平山小太郎、樟田小次郎、古郡次郎」・「五十七番 小山田四郎、三浦平六、小山田五郎」の名がある。後々郡内地方に重要な関係をもつ両氏の初見史料である。この史料だけから即断はできないが、古郡氏は武蔵横山党あるいは地縁の平山氏とともにあり、平姓小山田氏は三浦氏とともにある。いずれにしろ、甲斐国の武田氏有縁の武士とは位置付けられていない。

一三〇年前の前九年・後三年の役のときは武士団は国家の傭兵であるとともに権門貴族の私兵であり、棟領の

源義家以下を単なる庸兵隊長として充分にコントロールすることが出来た。同じような儀礼であっても都市貴族たちは余裕をもってながめていたであろう。しかし、今度は頼朝は示威を終えたと王朝国家の官位を辞してささと鎌倉に帰ってしまった。建久三年（二七）に頼朝は征夷大將軍となった。さきにのべたように鎌倉幕府の評価は諸説あるが、どれだけ未成熟であったとしても王朝国家とは別の統治原理をもつ軍事政權であることは間違いないのである。地方の武士たちは東国も西国もともかくもこれに頼って自分たちの政治的な立場を確立してゆく根拠を得た。鎌倉殿の「御」家人であるのかないのか、ないとしてもさきに述べたような貴族の家の子や侍者、侍う者ではなく武士という社会的身分を獲得した。

史料のうえで真つ先に登場する郡内地方の武士団は古郡氏であった。古郡氏という姓には特徴がある。この姓は郡司の権威を強調している。八〇九世紀の荘園絵図などで「古郡所」という表記がみられるが、これはかつての郡衙の所在を指している。また、平安時代の『今昔物語』中の武士藤原利仁の在所では、かつての古墳が「人呼びの丘」と呼び習わされて新たな支配の拠点として利用されている話がでてくる。都留郡の古郡氏が古代の譜代郡司の系譜を引くかどうかは不明であるが、本拠地としたのは平安時代の『和名抄』の段階で確認される古代郡郷制下の都留郡古郡郷であった。しかも古郡郷は郡家郷と考えられる。古郡氏は「武田の党」の一部でもなく、甲斐国衙在庁として動員されたものでもなく登場してくる。内乱期に登場する都留郡に関わりのある武士団は両軍を通じて古郡氏だけである。すくなくとも古郡氏が平安末期の時点で郡内地方に卓越した勢力をもっていたと推定される。

都留郡古郡氏は内乱期から和田の乱の滅亡にいたるまで一貫して武蔵の横山党系の独立した武士団として活動している。武蔵旧国造の後を称する小野姓横山氏は武蔵南部から相模北部を代表するいわゆる武蔵七党の一つと

される大族であった。桂川（相模川）の隣接する下流域である相模国津久井・愛甲両郡の有力な武士団も与党の一族であった。『小野系図』・『七党系図』等によれば、都留郡の古郡氏の祖とされるのは「古郡別当（別当太夫）」と称されたという横山忠重である。後に鎌倉で騒動を引き起こす古郡保忠の祖父に当たる。この「古郡」については、相模国愛甲郡古郡、あるいは武蔵国児玉郡古郡を比定する説があるが、上に述べたようにこの名乗りは単なる在地名ではなく郡全体での権威を背景とするものである。都留郡の古郡以外ではそのような痕跡は認めがたく、逆に横山党古郡氏と都留郡との早い時期からの関わりを予測させる。両系図における古郡名乗りの人物比定にブレがあるが、内乱期からさかのぼる忠重段階から「職」として郡・郷司（地頭）を獲得したことを物語っているとも考えられる。

古郡氏が本拠地としたのは、上野原町域の桂川北岸段丘の先端であったと推定される。この付近一帯には、「古郡奉証明神」という古称をもち近世上野原宿の郷鎮守となった牛倉神社があったり、堀の内等の城館址地名も残っている。また、上野原町甲東地区にあって縁側から相模湾が見通せることで有名な鶴川最奥部の江月寺の山号は古郡山と称しているのも、いまは消え去ったなんらかの記憶の伝承とも考えられる。

第二節 鎌倉武士古郡保忠の活躍と滅亡

勇士古郡保忠

頼朝が死んでからはと遠くない建仁二年（一二一一）八月鎌倉で騒動がおこった。中味は政治むきものではなく「女論」と呼ばれるものだった。こんなプライベートな事件でも『吾妻鏡』に詳しく記録されていることからみて、鎌倉中の話題をさらったものだったのだろう。御家人古郡保忠は舞女（白拍子）の「微妙」というものと「比翼連理の契り」を成すような深い仲であった。ところが、保忠が甲斐国に下向中に彼の帰りを待たずに「亡き父の夢の後を訪んがため」と称して榮西禪師を頼って尼になってしまった。これを榮西の壇越であった北条政子が哀れんで居所を世話して庇護者となった。鎌倉に帰ってきた保忠はこの成り行きを知って榮西のところへ押しかけ弟子達を相手に大暴れをした、というわけである。近隣の者たちがびっくりにして駆けつけたが政治的な異事ではないというわけで、即ち退散してしまった。政子は小山朝光を遣わして保忠の乱暴狼藉を赦したという。このエピソードからは鎌倉初期の武士達の生きづかいがきこえるようである。御家人たちは自分の御恩と奉公はさきほども述べたように親子のごとく將軍家と直に結ばれていると思っていた。それと戦乱を自らの力量で乗り切った自負が折り混じった独特の気風があった。頼朝生存時に熊谷直実が出奔して頼朝がうろたえた事件と同じような一件で、この場合は政子が家の子の駄々を引き取って納めたということである。『吾妻鏡』の編者は、騒動の内容は当時としてはありがちなことで一〇年後には主人公が誅滅されたとしても鎌倉武士の典型のような保忠の人物像を伝えたかったのであろう。また、保忠は鎌倉と甲斐国の古郡郷を往来していたようであるが、保忠は番役勤仕のみならず「日来」（常日ごろ）鎌倉で活動しているような御家

人であったことが窺える。

鎌倉初期はたびたび有力武士団の「反乱」があった。その間には多くの誅滅があり新たな「職」の宛行やその武士の本貫地とは関係のない着任と以後長きにわたる定着があった。結果的に全国的な武士団とその根拠地の再編ともなっていた。甲斐国に關係するものだけを見ても、武田党を束ねる者として内乱の初期には中心人物であった武田信義からして早くも治承五年（一二八二）には謀叛を疑われ登場しなくなるのである。嫡男の（一条）忠頼は争乱も終わりきっていない元暦元年（一二八四）に頼朝の面前で謀殺されている。また、お互いにどの程度の同族關係があったか判然としないが頼朝軍全体の一方の旗頭であった安田義定・義資親子も建久三年（一二三三）には殺されている。この流れのなかでは安田氏がほぼ消滅した以外は根絶やしにはならなかったことも一つの特徴である。さらには、一族の姓と族内でのそれぞれの在地名との關係、本家と分家の關係もかなりの程度曖昧である。

小山田氏の 元久二年（一二〇五）の畠山重忠の謀叛や建保元年（一二三三）の和田乱もこのような文脈のなかにあ都留郡入部 入部。内乱時に主力軍団の一つであった平姓秩父党を率いた畠山父子がやぶれた二俣川合戦の交名のなかには敗軍のなかに櫛谷四郎・稻毛三郎らの名前がのせられている。これらと平姓小山田氏は同族で、『甲斐国志』は小山田有重に三子があつて上記二名と小山田五郎行平は兄弟である、としている。行平も当然反乱の側にあつて推測できないではないが、承久乱（一二三三）時の東山道軍の従軍武士のなかに小山田太郎の名があり、あきらかに甲斐・信濃の軍団の一翼となっている。都留郡の小山田氏の始まりについては、『甲斐国志』・『小山田氏略系図』の記事を援用しながら行平が畠山乱時に山峡に逃れて都留郡に入り開祖となった、小山田太郎は行平の子である、というのが通説である。これを反証する新史料もないわけであるが、典拠とする両史料が新しすぎる。はっきりしているのは、承久乱時に甲斐国の郡内地方になんらかの諸職をもつ独立した武士として

小山田太郎が入部していたことである。そしてその地は多分、古代郡郷制の多良（田原）郷域と推定される。その規定は一つには、つぎに述べる和田乱後の勲功録による。『吾妻鏡』によれば、敗軍の古郡氏の遺領の初狩川沿いにあつたとおもわれる波加利本庄については武田冠者、同新庄については島津衛門尉、古郡は加藤兵衛尉、……、へとなつてゐる。大まかにいって都留郡の郷をなぞっているが、これは当時の郡内地方の状況をよく反映していると考えられる。古代から中世にかけての日本の農業の生産拠点は、戦国期から近世にかけての時期ほど転換していない。古代の生産拠点をしめす郷は鎌倉時代にあつても依然として拠点であつてその一部は荘園となり他の場合公領として多くの場合郷名も引きつがれてゐた。郡内地方の場合、最大の生産拠点の一つであつたと推定される多良（田原）郷の存在に注目したい。小山田氏は後々ここを本拠地としてゐるのである。即ち、畠山乱の一件とは無關係にすでに武蔵の小山田荘を本拠とする武士団の一部が独立した御家人として市域に入部しており、その根拠としたものは郷地頭であつた、としてよいのではあるまいか。いま一つ加えれば、小山田行平・太郎を親子とし行平を開祖とする説は系図に信頼性が乏しく、議論としても無理がある。時期的にみても承久乱に独立した武士として甲斐国の守護の催促に応じて出陣したものとおもわれる小山田太郎を、都留郡小山田氏の起点として掲げたい。

和田の乱と 建保元年（一二三三）に和田乱が起つた。幕初以来くり返されてきた、有力武士団に対する幕府機都留郡 構・北条氏方の執拗な挑発と反発する武士団の暴発という経過は同じであつたが、今度の場合は張本とされる和田義盛は一個の武士団の長というよりは軍事故権である鎌倉幕府全軍を象徴する武将と見なされてゐた。和田氏は鎌倉の後背地を本拠地としており、与党の範囲も大きかつた。しかし、出目的には本家筋に当たる三浦氏は動かなかつた。ここでも、一方で血縁・血盟を重要視する武士団が他方では独立した御家人は独立

した政治的行動をとる姿を見ることができるといえる。戦闘は鎌倉市中で行われ大激戦ではあったが和田氏側の全面的な敗北で終わった。和田方に武蔵・相模の氏族横山党に属する武士が大挙して加わっている。惣領横山時兼が和田義盛の姻族だった故にとされているが、単なる和田・北条の私闘でないことは相模川流域や武蔵南部の武士達が集中的に鋒起していることから明らかである。甲斐国都留郡の古郡保忠もその中にあった。この反乱は鎌倉初期では最大でしかも勝利したこれ以後の北条氏の専制権力を約束するものだっただけに、乱後の誅罰も徹底していた。「古郡左衛門尉（保忠）の兄弟は甲斐国板東山波加利の東競石郷二木（大月市初狩）で自殺」したという。『吾妻鏡』の死者の交名に保忠とやらんで「同五郎、同六郎」以下の名がある。これと関連すると思われるが、承久乱の宇治合戦で打ち取られた甲斐国関係の武者の一人として古郡四郎の名をあげている。和田乱で敗死した者の兄弟かとの推測も可能である。やはり古郡氏もまるごと滅亡したのではなかった。

古郡保忠の遺領配分についてはほかにもしらぬことがあろう。さきにも少し触れたが、保忠の遺領としては波加利本庄・同新庄のほか、古郡・岩間・福地・井上の郷名が記録されるだけで具体的な権利関係はわからない。おそらく古郡氏は本拠地の古郡郷から福地（大月市鳥沢）さらに支流の笹子川・葛野川（先づの比定に当てはめれば賀美・征茂郷）については開発領主としての諸権利をもっていたものとおもわれる。その直接的勢力が桂川上流の都留市域方面には及んでないことも読みとることができる。この史料の記載からみて波加利庄については皇室御領（長講堂領）の荘官諸職であることは間違いないが、他の郷名を書きならべたものはいわゆる郷地頭・郷司に関連する権利であろう。この配分によって波加利本庄の地頭職は武田氏惣領の武田冠者（信光）に宛行われた。信光は承久乱時の東山道軍の大將軍でもあった。はっきりした文書史料のうえからは国中の武田氏の勢力が郡内地方に入ってきたはじめということになる。武田氏族は鎌倉時代を通じて新しい分立をくりかえす。

波加利庄についての伝領関係は不明の点がおおいが、少なくともこれが武田氏関連の郡内地方進出の拠点となった形跡はない。ただ長講堂領波加利庄自体は室町時代中期の応永十二年（一四三三）の時点でも「年貢未定」の荘園として記録されている。一方、古郡氏の本拠地は加藤景長に宛行われた。景長は源頼朝の郎党で堀原景時誅滅時に連座して失脚した景簾の息である。これ以後土着して屈曲を経ながらも、長く戦国時代まで郡内地方の有力な政治勢力となっていく。福地郷を宛行われている「鎌田兵衛尉」は内乱期の勇士として『保元物語』で有名な正清ではなく、その遺領を相続した息女かその縁者であるに違いない。福地郷比定の下鳥沢（大月市富浜町堀内）には館社の遺構もある。

以上のような治承・寿永内乱期から鎌倉前期にかけての郡内地方の状況は、承久乱の戦後処理をもって一応のゆきぶりの時期が終った。川下の武蔵横山党の一族に属しながらも、「根生い」の武士団として活躍した古郡氏は滅んだ。それ以後は、都留市域を中心に上流部の小山田氏、上野原町域を中心として下流部に加藤氏が御家人ないしはそれに近い存在として上級権力とのパイプ役となって並立している。文書史料には登場しない谷戸やとごとの小領主は未だ水面下にあった。鎌倉末期までは、郡内地方の相対的な安定期であったようである。